

『児童心理』一九六一年四月（児童研究会編／金子書房）

教育テレビ利用の限界点

矢口 新

教育テレビ利用の限界

教育テレビというのはどの辺までの番組をいうのであろうか。ちよつと考えれば、だれにもすぐ頭に浮かぶのは、現在最も多く放送されている学年別・教科別の学校放送番組である。しかし教育テレビとはそれだけに限るといえば、だれも即座に賛成しかねるであろう。そういう形式をとらないでも、教育テレビという名称をつけてもおかしくないものがあるからである。否、考えようによつては、その方が教育テレビと名づけるにふさわしいとも考えられるからである。このことは説明をしないとわからないかもしれない。というのは、一般に教育テレビと考えられている番組は、案外利用価値がないかもしれない。むしろそうでないものの方が利用価値があるということになるかもしれない。現にそういう考え方が、アメリカで表明されているの

である。利用というようなことを考えるならば、広い立場に立ってそうした問題も考えてみる必要があるというものである。

一般に教育テレビといわれるのは、学校放送番組といわれるものである。これは利用をすることを予想してそのために作った番組である。ところでこの場合の利用というのはどういうことであらうか。それは学習における利用であらう。そのためには文部省の学習指導要領に合わせ、カリキュラムに一致するように考え、学習指導の方法をいろいろ工夫するということもなされている。工夫された教材がこのようなにして提供されるのであるから、学習指導において十分利用されうると考えるのは決してあやまりとはいえないであらう。

事実、提供された教材を見るということが、利用ということであるならば、見る意思さえ

あれば見られるわけであるから、十分利用にたえるものといわなくてはならぬ。しかも学習指導要領にしたがい、学校のカリキュラム作成の一般的傾向を調査し、教科書の構成を考慮に入れてあるとすれば、テレビ局としては、まず最善の努力をしているものといえよう。

一つの番組の時間は二十分から三十分ぐらいであるから、教師や学校にこれを見せようとする意思さえあれば、見る時間は十分生み出せるはずである。時間の最低基準にさしかえるなどというばかなことを考えさせなければ、何も問題はないというべきであらう。

日本の教師には一つのくせがあつて、このようにして学校の教育時間をさいて見せる場合には、これを徹底的に利用しようと考え、つまり理科の番組として放送された教材は、これを理科の学習の教材として利用しようと考え、これは、ただ見るといふ利用でなく、自己のクラスの学習のカリキュラムに合わせて、その教材として使おうというわけである。しかしこうなると、どうしても限界の問題に当面しなくてはならなくなる。それはテレビを使おうとした人ならばほとんどすべての人が認めていることであるが、カリ

キュラムや指導計画にいかにしてマッチさせるかということである。提供された教材は、一般的には十分にカリキュラムへの適応とすることを考えているはずであるから、その点では問題ないはずであるが、一つの学級の指導計画の中へ具体的に入れようとするとき、必ずしもスムーズには位置づけられない。一般的に見せておけば、ちゃんと見せられるが、毎日行なわれ進行してゆく学習のある場所へ位置づけようとするとき、うまくあてはまらないということである。

しかしこれも考えてみれば当然のことであって、テレビの教材提供に合わせて全面的に学習をしようと計画すれば別のこと、教師が自己のクラスの学習の計画を独自にすすめたり、教科書にしたがって学習をしたりすれば、放送される教材は、そこまで具体的に一々の学級に適応するようには考えられないことは、いうまでもないことである。これはテレビの利用の限界であるといえれば限界というべきであろう。しかし、これはよく考えてみると、現在のような組織で放送されるテレビにおいては当然あることで、それを無理に学校のカリキュラムに合わせようとか、学習指導に合わせようとか考える方に無理があるのである。全国を相手にしてなされる

放送であり一週間に一回、二十分ぐらいの教材が出されるのを、教科の教材として学習のプロセスの中に位置づけようとしたら、それはできない相談である。その意味では限界でもなんでもありはしない。限界などということばを使用したらテレビの方でいやがるのではないか。

現在のような体制のもとでテレビを利用するというのは、結局テレビを見せるということ筋としたものになるより仕方がない。それ以上の利用を考えない方が自然であろう。毎週、あるいは毎日でもよいが、きまつた時間に見るのである。そうして見つけける間にそれぞれの教科に關したことを勉強して行くのである。あまりそれをクラスの学習計画の中に入れようと思わない方がよい。前後の指導などというものもおかなくてもよい。いわば課外の読み物を読んでいる時間と考ればよい。そういう時間が学校生活のプログラムの中へとり入れられたと考ればよい。学校図書館で好きな本を読む時間というのが設けられている学校があるが、それと同様だと思えばよいわけである。

しかし、それでは折角のよい教材が十分に子どもに理解されないと考える教師も多いであろう。それなら、よいテレビの放送した

教材を学習する時間というものを設けたらよい。それはただし現に学級のもっているそれぞれの教科の学習指導計画とは別なものにする方がよからう。テレビの教材を自分の方へ引き入れようと思わないで、テレビの教材に従って学習するのである。大体は教科ごとにテレビ教材も放送されているが、その教科ごとというのは、なにも今やっている学習に合わせてということではなく、その分野のことを考えたらい。そうすればテレビはそれなりによいものを放送してくれるから、子どもの経験・知識も豊かになり、やはり見せただけのことはあるのである。自己の学習指導のプロセスの中へ入れようとするとき、やれ時間的には来週の方が都合がよいとか、もう少し時期的にずらしてくれらうとかという不満が出る。そういう不満がこうじて来ると、テレビをキネマにとつておいて何度も使用できるようになっているとよいなどと考えるようになるが、そうすると、テレビにテレビならざる性格のものを要求していることになる。

テレビの教育利用の限界は？

以上、教育テレビの利用ということを考えてきたのであるが、ここで教育テレビというのは

いわばテレビを学校教育に利用して行くという考え方のもとに、特に作られた番組の一群をさしているのである。現在の日本では、教育テレビというものはそういうものだという常識が成り立っている。つまり教育テレビとはテレビによる教材の提供だと考えられていてよいためである。だから教育テレビの利用とは、その放送されたテレビ教材の利用ということになり、それは現在見られる通りの条件のもとに放送されているのであるから、その利用を考える場合も当然、その条件が前提となつて来なければ具体的ではない。そう考えると、前に述べたようなことになるというわけである。

しかし教育テレビ即教材テレビではないはずであろう。今の日本の状態は、教育テレビといえは、教材テレビということになっているが、将来はもつとさまざまな教育テレビが実現してよいはずである。つまり日本では、テレビの教育利用ということは教材テレビという所に落ちついているということである。それは別な見方からすれば、テレビの教育利用が現在はいくつかの限界の中で実現しているということである。つまり今の放送局のあり方やそのもつている力からすれば、またそれを受けとる学校側の考え方もあつて、

NHK及び民間の教育放送を中心にして、前中に教材テレビを放送し、また受信するという形が限界だとも考えられる。そういう枠の中の利用の問題を今まで考えて来たのである。

ところが、テレビの教育利用という考えから幅の広い考察をすると、教育テレビの利用の問題もまた異なつた問題を提出する。しかしこれは今のところ、日本の問題とはなりそうにもない。たとえば、アメリカでフォード財団が援助してテレビの利用の研究をしたことがあるが、それはテレビによつてその地域の最もすぐれた教師の授業を放送し、すべての学級がそれを見るところという利用の仕方である。こうなるとある学年のある教科はだれというように、地域で最もすぐれた教師が授業をやるから、その他の各学校の教師は、テレビによる授業が行なわれている間は、そのマスター・ティーチャーの助手になるわけである。この実験研究は、フォード財団がいくつかの市の学校区の教育委員会に相当な援助をして本格的な実験として行なわれたが、結果はこういう利用の仕方については、否定的な答が出たようである。しかし、ここには、テレビの教育利用ということについてわれわれが現在もつている常識とちがつた

考え方があつたように思われる。ここではテレビは単に教材提供をするのではない。それは学校の教師によつて利用されるものとして置かれていてのではない。学校の教師にとつて代わるものとして置かれていて。この実験では今のところこの考え方は成立しそうでないという結論に達したが、その理由は、マスター・ティーチャーといえどもテレビの枠の中ではマスター・ティーチングはできないということである。つまり、マスター・ティーチャーといえども、テレビの枠の中に閉じこめられれば、レクチャー・メソッド以外に使いようがないということである。これだけの点からすると、わが国の使い方の方が賢明なように思われる。わが国では、教師にとつて代わらせようなどという役目を最初から考えていない。教師に使わさるべき教材を提供しているのである。先見の明を誇つてよいかもしれない。

しかしもう少し細かく検討してみると、また異なつた見解が出るかもしれない。先にも述べたように教師に使用される教材を提供しても、それには限界があるのである。今のところ見るという以外に利用のよい方式は考え出せない現状にある。それでは物足りないと考えるから、もつと学習の計画の中へ取

り入れようとする努力はなかなかあとをたない。けれどもそれは結局実を結ばない。これは不満のままに残されているわけである。結果はテレビを見るだけということになれば、やはりレクチャー・メソッドの中におけるテレビ利用という以上には出ないのであって、アメリカの出した結論と似たりよつたりである。もしこれをのりこえようとすれば、別な考え方を立ててこなければならぬことはわれわれもまたアメリカと同様である。

その別な考え方とは何であろうか？ それはこれからの問題であるが、まず第一に検討しなければならぬものは、テレビの学校にもち来たすものは、わが国で現在考えられているように、ただ教材だけであろうかということである。厳密に分析してみると、テレビで学校に流されてきているものは教材だけではないようである。もつとさまざまなものがある。それは子どもにいかなる意味の刺激を与えているのであろうかと考えてみるのもよいことである。またこういうように考えてみるのもよいことであろう。テレビが子どもに与える刺激は、もつとさまざまなものがあるはずだということである。たとえば質問を出すこともできるであろう。行動の指示をすることもできるであろう。その他まだできる

ことがありそうである。それをただ漠然と教材を提供すると考えていたのでは、次への展望をすることができない。

しかしこういうように考えて来るには、実はその前提としてテレビと学校の学習との現在の関係形式を打破しなければならぬのである。現在のテレビと学習の関係の形式は、結局は教師と生徒の間に教科書があるように、その教科書に代わってテレビがあるだけである。それは教師が教科書を使うように使われるものとして考えられ、提供されている。この考え方を切り替えることが要求されるであろう。こんなことをいうと、あるいは気がちがいのように思われるかもしれない。しかしアメリカあたりではしだいにそういう方向へ考え方が変わっており、日本でもやはりいつかは取り入れられることになりそうである。

教育テレビの可能性は？

考えてみると、テレビが放送して来るものは、直接それを見ているものの所へ行くのである。こんなことはあたりまえのことである。まさらいうのもおかしいようである。それは教科書でも同様である。ところで、それをどう見るか、教科書ならばどう読むかであるが、

それを一体だれがコントロールしているのか。現在は教師にその役目が負わされているようであるが、そこにおかしいことがありはしないか。テレビを見る者をコントロールするのは、テレビ自体が持つべきであるという考え方は成り立たないのか。教科書を読むみ方は、教科書自体が指示するというようにならないものか。それは教科書の中に読み方の注意を書くというようなことでなく、教科書の形式をすっかり切り替えることである。と同様に、テレビの出す内容も見る者をコントロールするように出せないかということである。

今の教材が子どもをコントロールできないのは、子どもにむずかしすぎるからである。また子どもが日々何を考え、いかなる答を出し、それをどう訂正し、次の段階へ進むかということとは全然考えられていないからである。ただおとなが考えるままにだらだらと述べられ、描かれているだけで、子どもに反応を求めていないからである。子どもにリスポンスを求めることになり、そこに教師が介在しないでもよいことになったら、その教材はもつとうんとやさしく、どんな子どもにも反応できるようなものでなければならぬ。もしそういうものができて、その段階ごとに生

徒が反応し、次へ進むように子どもをコントロールするようなテレビの内容が構成されるならば、それは、今われわれの常識にあるようなテレビ教材というようなものではなくなるかもしれない。

そういうテレビ教材が出てきたら、教師のあり方も変わるかもしれない。アメリカはマスター・ティーチャーが授業をすることを考えたが、今も依然としてテレビ自体によって見るものをコントロールし、そのテレビと生徒との両者の間に教育を成立させようという基本的な考え方を捨ててはいないようである。少なくともある分野や、ある段階では、そういう教育が成り立つと考えているようである。それはわれわれのもっている常識である、教師の使うものという考えを捨てていく。教師を置かないで考えている。否、あるいは置いても、今までの位置や意味において教師を考えていないということである。教師の手を通して子どもに教材を提供するのでなく、教師によって使われる教材を提供するのでなく、子どもをテレビによって直接コントロールするのである。こう考えるとわれわれの持っている考え方とはちがうようである。

しかしこれは、考えてみるとあたりまえの

ことであって、学校放送以外のテレビは、それぞれ見る者をいかにコントロールするかということ工夫している。その工夫の仕方はいろいろであるし、また学習をさせることを必ずしも目標としてはいいから、上に述べた方向とは異なることは当然であるが、それなりの工夫はある。学校放送として行なわれるテレビが、その点については教師に任せきりであるというのは、テレビの可能性をみずから限定しているともいえるのではないか。

しかしそうなるためには、単にテレビの問題以前に、教材提供やあるいは生徒の行動のコントロールの仕方についての基本的な研究が必要であろう。テレビの出す画面やことばが一つ一つ生徒に何を刺激として与えるか、それから生徒の反応がどう導き出されるかを十分把握しなければならぬ。そういう上で非常にキメの細かいプログラムが必要となるであろう。そのようなプログラムを出すためには、今の放送の組織・体制はとても役に立つまい。専門のプログラマーができて活発な組織的な活動を行なわなくては成り立たない。今の組織では、今のようないくつかの内容が出て来るのが当然といえれば当然である。

このように考えると、教育テレビの利用の限界ということも、どう考えたらよいのか。今、限界を考えるのがよいのか、無限の可能性を信ずるのがよいのか。しかし、それもわれわれ自身の実践によって決まるのではないか。限界を考えてなにもしなければ、それでおしまいであり、やろうとすれば社会の体制から切り替えて新しいこともできるのである。道具は結局人間が利用するものではないか。

(国立教育研究所)